# 人権つうしん

手をつなぎ　心ふれあう　明るい社会
（同和教育つうしん第８号より）

通算４３号　平成２４年（2012年）７月２日

発　行　長野県教育委員会教学指導課心の支援室
発行人　澤　井　　淳
〒380－8570　長野市大字南長野字幅下６９２－２
電話　　０２６－２３５－７４５０
FAX　　０２６－２３５－７４９５
Ｅメール　kokoro@pref.nagano.lg.jp

☆　人権つうしんは、教育委員会ホームページでもご覧いただけます。
→ http://www.pref.nagano.lg.jp/kyouiku/kyougaku/jinken51.htm

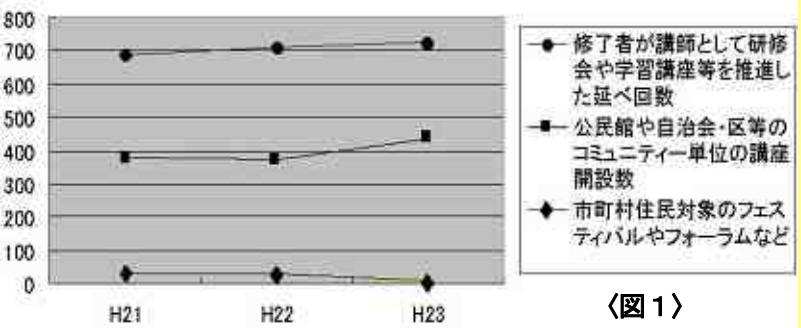
## 今、社会人権教育は… ～本県の取組の様子を見つめて～

これまで本県では、集落やコミュニティーにおける人権教育のより一層の進展を図るため、「地域リーダーの育成」に重点をおいて、各種事業に取り組んできています。具体的には、県が主催する「リーダー研修会」や「研究協議会（研修会）」、「リーダー養成講座（セミナー）」などを通して、研修を積み重ね、指導者としての資質やコーディネート力を高めた地域リーダーが、それぞれの地域に戻って、積極的に人権教育を推進していけるように努めているところです。

「リーダー養成講座」での現地研修 －五郎兵衛用水－

毎年、県教育委員会では、地域リーダーによる社会人権教育の推進状況を把握し、今後の施策や事業に活かしていくことを目的として、市町村を対象に「社会人権教育推進体制等に関する調査」を実施しています。調査結果より、過去３年間（Ｈ２１～２３年度）における取組の様子をまとめてみると、成果や課題として見えてきたことがあります。

〈図１〉は、リーダー養成講座（県主催）の修了者が、地域リーダーとして実施した人権教育研修会や講座等の状況を示したグラフです。グラフを見ると、「修了者が推進する研修会や学習講座等の延べ回数」が少しずつ増加していることが分かります。注目したいのは、その内訳の中身です。住民対象の人権フェスティバルやフォーラム等の開催状況と公民館や自治会・区等のコミュニティー単位の講座の開設状況を見てみると、イベント性の強い「フェスティバルやフォーラム」などがやや減少し、その反対に、小規模で継続性のある「コミュニティー単位の講座」が多く開設されるようになってきたことが分かります。これは、地域リーダーの方々の地道な取組によって、社会人権教育が草の根活動的に行われるようになってきた成果の一つであるように思います。



〈図１〉

しかし、その一方で、地域リーダーの高齢化や固定化が見られ、新らたなリーダーが育ちにくいといった現状があります。特に、若い年齢層の人たちをどのように巻き込んで育てていくかが今後の課題です。

これらの現状をしっかりと受け止めながら、“地域に根ざした社会人権教育”を推進していくために、「地域リーダー」のさらなる育成に努めていきたいと考えています。

シリーズ

# はっとしたその瞬間（とき）～Part１～

## なぜこんなに居心地がいいんだろう

### ー心地よい職場づくりー

松本市の中心市街地の一角に、私がお世話になっているＳ美容室があります。

四年前、松本市へ転勤になった私は、あれこれと迷いながら、Ｓ美容室を利用することにしました。知らない街で、理髪や美容の場所を選ぶというのは、私にとって一大決心が必要なことです。私が、Ｓ美容室を選んだのは、「居心地のよさ」を感じたからです。「居心地のよさ」というのは、「周りのひと・もの・ことを大切に思いやる空気が満ちている」ということです。

Ｓ美容室には、十数名のスタッフがいます。その一人一人が、周囲（周りのひと・もの・こと）に対して、細心の配慮を尽くしているのです。

例えば、カット台から洗髪用シートへ移動する時のことです。利用者は、歩いて移動するのですが、その一部始終をスタッフの皆さんが全身で感じて下さっているのです。移動の途中に、利用者には分かりにくい段差があります。そこを通り過ぎる時に、スタッフの皆さんの気持ちが集中します。目の前の仕事に専心しながら、背後ろで起きていることにも心を配っているのです。そして、利用者が段差を通過し終えると、スタッフの皆さんが「ほっとした気持ち」を共有するのです。それは、目に見えない一瞬の出来事であり、スタッフの皆さんにとっては、無意識のうちに行われていることなのかもしれません。けれども、私は、いつもほくほくした気持ちになります。「スタッフの皆さんに見守られている」といったささやかな幸せや喜びが、「居心地のよさ」を生み出しているのです。

透明感を放つ正面ガラスとＳ美容室

私を担当して下さっているＮさんの目は、私の髪を洗いながら、いつも美容室全体を見ています。その耳は、私の話に耳を傾けながら、いつも他のスタッフの声や利用者の足音を聞いています。そして、その心は、すべてのひと・もの・ことに対して、常に敏感に働いているのです。

このような「心配り」のあり様について、教育学者の佐藤学さんは、次のようにお話されています。

「その場を取りまとめる責任者や代表者にとって必要なセンスは『バスの運転手のような感覚（＝最上級の心配り）』である。バスの運転手は、進行方向を見据えながら、バスを取り巻く交通状況にも目を向けている。また、それと同時に、車内後方に乗っているお年寄りや幼児にも心を配っている。お年寄りや幼児を大切に思う気持ちがあるからこそ、心配りが生まれるのである。こういった心配りが、学校の教室やオフィス、あるいは各種事業の現場等において、日常的に行われていくことが大切である。」（Ｎ小学校・公開授業研究会にて）

（次頁へ）

S美容室の皆さんの心配りは、美容室の中だけに止まりません。被災地（栄村）への支援活動にもいち早く着手しています。その取組の様子がS美容室のホームページに掲載されていますので御紹介します。

## ―S美容室のホームページより―

先日　みんなで栄村にいってきたんです。私たちにも何かできる事はないかと考え、栄村の今を肌で感じてこようと…。お客様からご協力頂いた義援金、売り上げの一部の義援金を持って行ってきました。（途中略）

車を運転していると、まだまだ地震の形跡が残っています。でも、売店の方々も、食堂のおばさんも、北野天満温泉のおじさんも、敬老会をしていたおじいちゃん、おばあちゃんも、みなさん、素敵な笑顔でした。すごい！こちらがパワーをいただいた…そんな時間でした。自分たちにできること…ってなんだろうか。自分たちにできること…って。

社長、M、Sの３人で、栄中学校に行って来ました。
何か直接子どもたちの手に届けられないかと、皆さんのご協力をもとに集った義援金で５４冊の本を用意することができました。

栄村立栄中学校を訪ねて

当日、栄村は一面真っ白*!* なんとも言えない雪景色でした。栄中学校に到着すると、玄関に「絆」の大きな文字。そこに力強さと意味の深さを感じました。校長先生はじめ大勢の先生方、図書委員の生徒さんが温かく迎えてくれました。ちょっぴりドキドキしていた私ですが、先生から「子どもたちが、いつ来るかと楽しみにしていたんですよ」と聞き、ホッとした気持ちと嬉しい気持ちになりました。

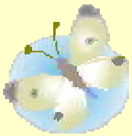
本の入った箱をみんなで開けると、生徒さんたちが本を手にし、目を輝かせて喜んでくれました。今回の事を通じて、栄村の皆さんとの出会いと少しでも力になれたという喜びをいっぱい感じることができました。

S美容室に来て下さっているお客様、スタッフみんなの思いがこのような形で届けることができ、改めてみなさんに感謝の気持ちになりました。
ありがとうございました。

届きました！
ありがとう。栄村中学校の皆さん！
メッセージ受け取りました！

栄村立栄中学校から
S美容室へ届いた
たくさんのメッセージ

S美容室の「最上級の心配り」は、被災地の皆さんの人権を守るための「実践的行動」となって、栄中学校へ届けられたのです。



### 心地よさの背景に

S美容室の皆さんの心配り―周りのひと・もの・ことを大切に思う気持ち―は、いったいどうやって培われているんだろう。何があのような「最上級の心配り」を引き出すんだろう。疑問に思った私は、S美容室の見えない一面を訪ねてみることにしました。

・・・・・・・・・・・・

朝、８時３０分。

営業開始３０分前です。身を切るような寒さの中、スタッフのTさんが、S美容室の正面ガラスを磨いていました。

（次頁へ）

白い息を吐きながら、きゅっきゅっと音を立てて磨いていました。そして、Tさんは、ガラスを磨き終えると、すぐさま入口の床タイルを磨き始めました。Tさんが手にした青い雑巾は、砂にまみれて、真っ黒い雑巾に変わっていました。

床タイルを磨いているＴさん

中に入ると、「おはようございます」「いつもありがとうございます」「今日はよろしくお願いします」などと、スタッフからの快活な挨拶がシャワーのように飛んできました。「あっ、こちらこそお願いします」と戸惑っていると、本部長さんが「どうぞこちらへ」と案内して下さいました。室内は、二人のスタッフによって、開店の準備が着々と整えられていました。奥の方では、先輩スタッフが後輩スタッフに技術指導をしていました。熱心なその姿に圧倒される思いでした。

8時40分。スタッフの号令とともに「朝のミーティング」が始まりました。私もいっしょに参加させていただきました。

## 「朝のミーティング」の６つの場面を切り取って、少し紹介したいと思います。

① 発声練習

・自分の表情や姿勢を意識して、周りのスタッフを鏡にしながら、「いらっしゃいませ」「はい。かしこまりました」と声を響き合わせていました。

② 社長のお話

・その日は、美容室の行事である「夢合宿」に関するお話でした。参加の心構えを指導されていました。スタッフ一人一人の表情や体調を確かめるようにして語りかけている社長さんの姿が印象的でした。（※夢合宿…スタッフ主体の研修合宿のこと）

③ スピーチ

・スタッフによる１分間スピーチがありました。日常の中で、自分が感じていることや考えていることを自らの言葉で語り合っていました。スタッフ同士が頷きながら聴き合っていました。

④ 読み合わせ

・全員で１冊の本を輪読し、意見交換をしていました。その日は、「心配」について考え合い、「心配は心を配ること」として共通理解を深めていました。

⑤ 利用者の状況確認

・その日の予約利用者に関する情報（時間やメニュー）について、スタッフ全員で確認し、共有し合っていました。そこには、厳しいほど真剣な眼差しがありました。

予約者情報を共有し合う様子

⑥ スタッフの予定確認

・スタッフの勤務（早退、欠席等）について報告し合っていました。

「今日は子どもの具合がよくないので、早めに退社します」というMさんの申し出に、周りのスタッフから「お大事にね」「早く治るといいね」などと、たくさんの声がかけられていました。

（次頁へ）

六つの場面（①～⑥）を参観する中で、私は、はっとする瞬間に出会いました。

「朝のミーティング」の途中に、電話が鳴りました。利用者からの予約申込みの電話のようでした。電話が鳴ると、室内の空気が一変します。電話の向こう側にいる利用者に対して、一斉に心と体が向けられるのです。その中を数名のスタッフが、予定表を抱えて、電話へと急ぎます。驚くほどの素早さです。そして、「おまたせしました。S美容室、○○でございます」と、速やかな上に落ち着いた対応がなされていました。そこには、「利用者に対して少しでも失礼がないように」といった配慮があるのでしょう。S美容室のチーム精神の見事さや、チームプレイの巧みさに大きな感動を覚えました。

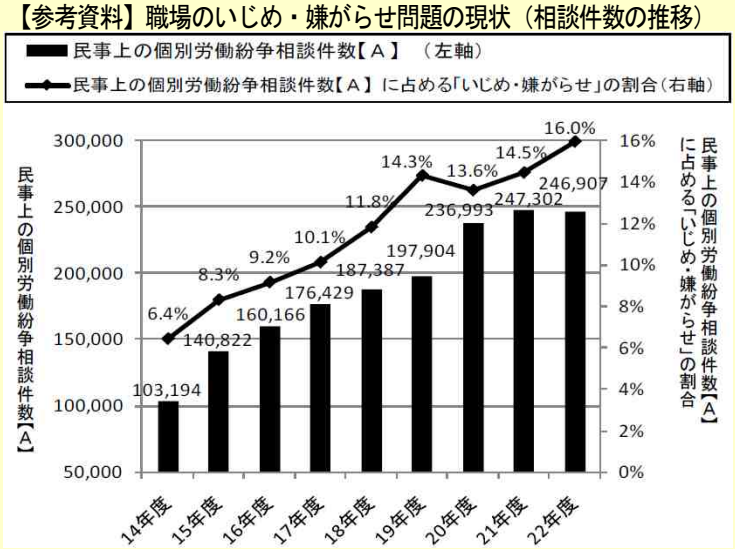
S美容室の「朝のミーティング」は、営業前のほんのわずかな時間の中で行われていました。発声練習やスピーチ、読み合わせ、利用者の状況確認などが「一連の営み」として、毎日欠かすことなく積み重ねられてきているのです。それは、決して華やかではなく、周りからは見えにくい取組なのですが、スタッフ一人一人の心に染み入るように、地道にくり返されていました。

スタッフによる読み合わせの様子

私は、この「一連の営み」こそが、S美容室の中に「最上級の心配り」を生み出すとともに、「居心地のよい職場づくり」につながっていることを実感することができました。

近年、不機嫌な職場が増えているようです。不機嫌な職場というのは、いじめや嫌がらせなどのハラスメントが起きている職場のことです。職場における「ハラスメントの相談件数」は著しく増加しており、特に、パワーハラスメントに関する相談が目立っています。最近は、ハラスメントに関わる研修会の依頼も多くなってきました。（「県教育委員会」への依頼状況より）

【参考資料】職場のいじめ・嫌がらせ問題の現状（相談件数の推移）




※職場のいじめ・嫌がらせに関する相談は増加傾向にあります。（厚生労働省、平成２３年５月）

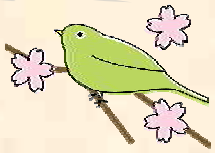
ハラスメントは、その判断が難しい上に、発生した場合には、その影響は、加害者と被害者だけに止まらず、職場全体の雰囲気にまで及ぶことがあります。ハラスメント問題への対処の仕方について研修することはもちろん必要ですが、それ以上に、日頃から「相手や周りの人を大切に思う気持ち（思いやりや心配りの気持ち）」をみんなで育てていくことが大切です。

シリーズ

# はっとしたその瞬間（とき）～Part2～

## 剛さんの心のうちにふれて

### ―外国籍の母と家族とのくらし―



四月。

新たな子どもたちとの出会いに胸を弾ませながら、私は、Ｌ中学校へ赴任しました。新年度が始まる慌ただしさの中で、子どもたちと共に紡ぎ合う新たな生活や初めての学習に喜びと期待を感じていきました。

私のクラスには、転入生の剛さんがいました。がっちりした体格と日に焼けたその風貌は、スポーツ選手さながらの雰囲気を醸し出していました。

予想していたとおり、剛さんは野球部に入部し、生き生きと取り組んでいきました。剛さんは、人懐っこく、たいへんユーモアにあふれていたので、休み時間になると、いつもその周りにはたくさんの友だちが集まっていました。その中で、一際目立って笑い転げている剛さんの様子を見ると、まだ出会ったばかりだなんて信じられませんでした。

### 「運動着、忘れた」

学級の時間。

その日は、クラスの親睦を兼ねて、子どもたちと「地域巡り」に出かけることにしました。みんなが運動着に着替えている中、剛さんは一人、机に突っ伏していました。「どうした？早く着替えて出かけるぞ」と、私が声をかけると、「運動着がない。忘れた」と、力のない返事が返ってきました。塞ぎ込んでいる様子の剛さんに、私は、「そうか。それなら仕方ないな。次は忘れないように頼むぞ。今日は、その格好（学生服）でいいから出かけよう」と、元気づけるように言いました。すると、亮さんが、剛さんを気遣うようにして、「先生、剛のことなんだけど…、剛は、体育の時間も、運動着持ってきてないんだよね。だから、まだ一度も体育やってないんだけど、何か理由があるんじゃないかと思って…」と、私に話してくれました。

私は、子どもたちに外で待っているように伝えると、突っ伏したままの剛さんの横に座り、「本当は忘れてるんじゃないよな。何か理由があるんならさ、先生に話してくれないかな」と語りかけてみました。剛さんは、黙ったまま下を向いていました。少しの間、沈黙が続きました。ふと見ると、机の上に涙が落ちていました。剛さんは泣いていました。そして、机の上に置いたその手は、小さく震えていました。拳をぎゅっと握りしめながら、剛さんはぼそっと言いました。

「俺、運動着買ってない…」

そのひと言を聞いて、私は、はっとしました。

――剛さんは、母子家庭。５人妹弟の長男でした。外国籍の母親は、夕方から朝まで働きに出ていましたが、経済的には安定していなかったのです――

「ごめんな。先生が気づいてあげられなくて。運動着のことは大丈夫。もう心配しなくていいからな」私は、剛さんが少

（次頁へ）

しでも安心できるように、ゆっくりと話しました。剛さんは、しばらく泣いていましたが、しびれを切らして呼びに来た亮さんらに促されるようにして、みんなが待っている所へ走っていきました。

「地域巡り」に出かけてアユを手掴みで捕まえてみせる剛さん

さっそく私は、L中学校の卒業生にお願いをして、使っていない運動着を何枚か譲ってもらいました。そして、その日のうちに、剛さんの家まで届けることにしました。新学期が始まって5日目、初めての家庭訪問になりました。

剛さんを訪ねていくと、小さな妹弟たちが出迎えてくれました。「誰っすかー?」と、奥から赤ちゃんを抱っこした剛さんが現れました。赤ちゃんは、剛さんが手にしたミルクに吸い付いて、一心に飲み続けていました。

「ミルクあげるの、上手いなあ」と、私が感心していると、「まあ、いつものことだから」と、剛さんは慣れた手つきで赤ちゃんを抱き上げて見せました。そして、片手で運動着を受け取ると、「俺、体育やりたかったんだよ。先生、ありがとっ。それじゃ、忙しいから」と言って、また奥へ行ってしまいました。剛さんは、母親が仕事に出かけている間ずっと、親となって、赤ちゃんの世話をしていたのです。

私は、大きな衝撃とほんのりとした温かさが入り交じったような、何とも複雑な気持ちを感じながら帰途に着きました。

## 「剛さんとお弁当」

六月、中体連の野球大会がありました。その日は、全校でM町の野球場へ出かけることになっていました。

朝、剛さんに行き会うと、どことなく調子が悪いような顔をしていました。「どうした?大丈夫か」と声をかけると、「別に…」と、吐き捨てるような返事が返ってきました。

「弁当は持ってきたか」と聞いてみると、剛さんは、それには答えず、急ぎ足で行ってしまいました。私は、すぐ後からやってきた同じ野球部の秀さんに、「(剛さんが) もし弁当を用意していなかったら、すぐに連絡してほしい」と伝えました。すると、秀さんは、少し考え込んでから、次のように話してくれました。

「そう言えば、練習試合（休日練習）の時に、弁当を持ってきてなくて、剛は、みんなから分けてもらっていました。最近は、『体調が悪いから』って、休日練習に出てこないからよく分からないんだけど…」

それを聞いて、私は、すぐに学校近くのコンビニへ車を走らせました。そして、おにぎりとサンドイッチ（朝と昼の分）を買い込んで、学校へ戻ると、剛さんを呼んで手渡しました。

剛さんは、いまいち調子が悪そうな顔にいくらか笑みを浮かべながら、「先生、今、食べてもいい?」と小声で言うと、よほどお腹を空かしていたのか、かぶりつくように食べ始めました。

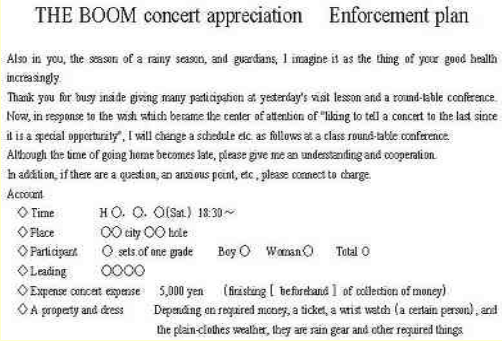
「今度の休日練習はいつあるの?お母さんに弁当作ってもらえそうか?」と尋ねると、剛さんは、サンドイッチを頬張りながら、「母さんは、朝6時に帰ってきて、そのまま疲れて寝てるし…。それに、漢字とかひらがなとか読めないから」

（次頁へ）

と、家庭の事情を話してくれました。

その日の第2試合と第4試合は、L中学校の試合でした。そこには、ベンチから人一倍声を張り上げて、懸命に応援する剛さんの姿がありました。

ある土曜日のこと。私は、剛さんの母親が仕事に出かける前の時間を見計らって、剛さんの家庭訪問をしました。前日に作成した「英語版の学級だより（コンサート鑑賞計画）」を持参しました。



THE BOOM concert appreciation　Enforcement plan

Also in you, the season of a rainy season, and guardians, I imagine it as the thing of your good health increasingly.
Thank you for busy inside giving many participation at yesterday's visit lesson and a round-table conference.
Now, in response to the wish which became the center of attention of "liking to tell a concert to the last since it is a special opportunity", I will change a schedule etc. as follows at a class round-table conference.
Although the time of going home becomes late, please give me an understanding and cooperation.
In addition, if there are a question, an anxious point, etc., please connect to charge.

Account

◇ Time　H ○. ○. ○(Sat.) 18:30～
◇ Place　○○ city ○○ hole
◇ Participant　○ sets of one grade　Boy ○　Woman ○　Total ○
◇ Leading　○○○○
◇ Expense concert expense　5,000 yen　(finishing [ beforehand ] of collection of money)
◇ A property and dress　Depending on required money, a ticket, a wrist watch (a certain person), and the plain-clothes weather, they are rain gear and other required things

「英語版の学級だより」

剛さんの母親（スーシーさん）は、「びっくりしたよ。先生、ありがとね。うれしいね」と、片言の日本語で、自分の思いを伝えてくれました。

私がスーシーさんと直接会って話をするのは、3回目でした。スーシーさんは、日本語より英語の方が得意でしたので、私は、拙い英語を駆使しながら、剛さんの弁当のことや家庭生活のことについて立ち話をしました。スーシーさんは、「剛は、弟と妹のことを大事にしてくれる。すごく頼りになる」と語ってくれました。その様子は、嬉しそうでもあり、申し訳なさそうでもありました。

この時のスーシーさんのお話から分かったことですが、野球部の休日練習があると、いつも秀さんが剛さんへ弁当を届けてくれていました。日頃から剛さんを心配していた秀さんが、家族に相談を持ちかけたのだそうです。そして、秀さんの母親が、スーシーさんに了解を得て、「お弁当支援」を始めたということでした。私は、秀さんと家族の皆さんの心配りが嬉しくてたまりませんでした。

## 「剛さんと共に」

2年生の冬。

新年度生徒会の役員改選が始まりました。剛さんは、クラスの総意により会長候補に選ばれました。選挙活動に取り組む中で、剛さんは、仲間の支援を受けながら、少しずつ手応えを感じているようでした。

立会演説会の日。応援演説の中で、遼さんは、剛さんについて次のように語りました。

「剛君には、2歳の妹と3歳の弟、そして、小さな赤ちゃんがいます。剛君は、休日になると、赤ちゃんを抱いて、妹や弟を連れて、近くのスーパーへ買い物に出かけます。赤ちゃんのミルクやおむつ、それから生活に必要なものを買うためです。今、剛君の家族を支えているのは、毎日夜遅くまで働いているお母さんと、ここにいる剛君です。でも、これまでに剛君は、僕たちに『たいへんだ』『めんどうだ』などと、不平や不満を言ったことは一度もありません。家族の大黒柱として一生懸命生きている剛君だからこそ、L中の生徒会長としても、みんなを力強くリードしていってくれるに違いありません（以下略）」

剛さんは、全校からの信頼を得て、見事に生徒会長に当選しました。当選結果に歓声を上げた子どもたちは、人一倍体の大きい剛さんを取り囲んで、力一杯胴上げをして喜び合いました。

学級ＰＴＡ主催の「母親の会」では、スーシーさんに声をかけて、子育てに関わる話を聞いたり、剛さんの当選の喜びを共有したりするなど、外国籍のスーシーさんが孤立してしまわないように、

（次頁へ）

専心的にスーシーさんとの関わりを深めてくれていました。また、「母親の会」では、英語に堪能な方が、スーシーさんの通訳を務めてくれました。スーシーさんは、剛さんのことや家族のことをはにかみながら語っていました。

家庭における諸事情を抱えていた剛さんでしたが、クラスの仲間や保護者からの理解と協力を得て、暮らしや環境がよりよい方向へと動き出していました。

## 「剛さんとの別れ」

それは、あまりにも突然やってきました。

―剛さんとの別れ―

誰もがその事実を受け入れられませんでした。在留資格の更新手続きをしていなかったスーシーさんのこと（不法滞在）が新聞報道され、入国管理局により母国へ強制送還されることになってしまったのです。日本国籍を取得している剛さんは、スーシーさんや私と、何度も話し合いを重ねる中で、迷い、悩み、苦しみながらも、「これからもずっと日本で暮らしたい」という意志を貫き続けました。そして、児童養護施設での生活を決意していったのです。

最後の日。

目を真っ赤にして、剛さんは言いました。

「俺は普通に生活したい。普通に生活して、普通に別れたい。先生、頼むから、特別にしないで。俺のために時間を使いたくないから…」

私は、何も答えることができませんでした。ただ、ただ、涙がこぼれました。

## ――剛さんのことを語り合った１時間より――

（担　任）　みんなから剛に伝えたいことがあったら伝えよう。剛の希望で、お別れ会とか特別な時間はこの時間以外、もう二度ととらないから。

（　亮　）　剛とずっといっしょに野球をしていけると思ってたけど、残念です。俺たち野球部は絶対に勝ちます。

（美紀）　私は、剛君といっしょに生活できて、すごく嬉しかったです。修学旅行もいっしょに行きたかったのに…。せめてもう少しだけいっしょに生活したかったです。

（佳子）　剛君は本当に優しくて、周りの人のことをいつも感じてくれていて、すごいなって思ったし、そんな剛君のことをみんなは大好きだったし…、何にも力になれなくてごめんなさい…。

（　秀　）　今まで毎日、剛とキャッチボールしてきました。それが急にいなくなるなんて。俺は、明日から誰とキャッチボールしたらいいんですか。

（真一）　剛といっしょに卒業したかったのに…。修学旅行だっていっしょに行きたかった…。剛、今まで本当にありがとうございました。

（拓也）　剛がいるだけで、クラスが明るくなって、剛がいると、ほっとできました。剛がこのクラスからいなくなるって聞いても信じられなくて…。今まで楽しかったです。本当にありがとうございました。

涙を流し合った最後の語り合い

（次頁へ）

　涙ながらに語る子どもたちのひと言ひと言が、胸の中に染み入ってきました。剛さんのために、こんなにも泣きじゃくり、剛さんのことを、こんなにも感じているクラスの仲間たち…。

　剛さんは、じっと下を向き、机の上にこぼれ落ちた涙を、何度も何度も手でふき取っていました。そして、仲間の思いを精一杯受け止めようとしていました。その姿は、どうしようもない気持ちをこらえているようでした。

　次の朝、剛さんは、まだ暗いうちに、家族のもとを離れ、まだ見ぬ児童養護施設へと出かけていきました。

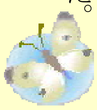
　スーシーさんと赤ちゃん、そして小さな兄弟たちは、スーシーさんの母国へ帰っていきました。

　それから、数年後。

　T町の桜公園へお花見に出かけた時のことでした。

「よう！先生じゃん。久しぶり！」と、後ろの方から声がしました。聞き覚えのある懐かしい声でした。ふり返ると、剛さんでした。剛さんは、児童施設の小さな子どもたちを引き連れて、遠足に来ていました。相変わらずの剛さんの姿に、思わず胸が熱くなるのを感じました。

　すると、剛さんは、「先生、それじゃ、忙しいから、また今度！」と、昔と同じようなことを言って、直ぐさま立ち去っていきました。



・・・・・・・・・・・・

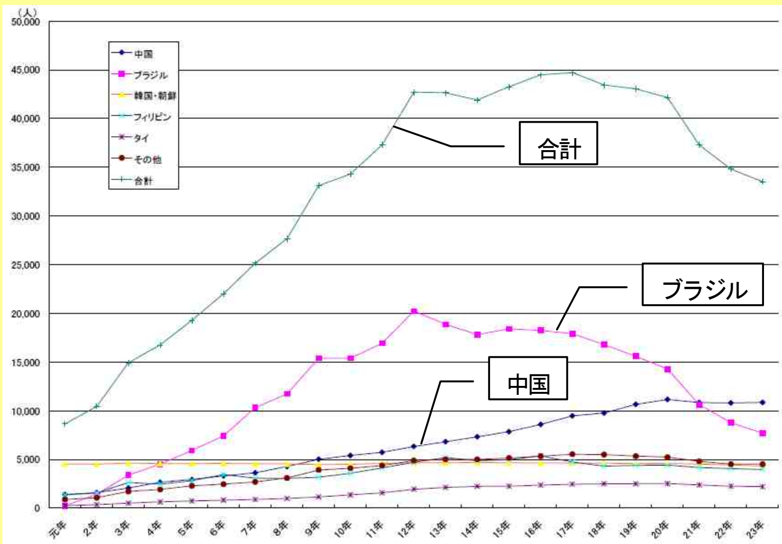
※本事例は、当時の剛さんを取り巻くエピソードです。本誌への掲載にあたり、剛さんの了解を得るとともに、人権保護（プライバシー）のために、具体的な一部を創作・再構成してあります。
なお、本文に登場する名前はすべて仮名です。

# 外国人の人権について考えてみましょう

　近年の国際化時代を反映して、在留する外国人は年々急増しています。それに伴い、様々な人権問題が発生しています。このような中、外国人に対する偏見や差別意識を解消し、外国人の持つ文化や多様性を受け入れ、国際的視野に立って、一人一人の人権を尊重していく観点からの取組が求められます。学校や家庭、地域が連携して、地域に在住する外国人や、地域の学校に在籍する外国人児童生徒等の実態を把握しておくことが何よりも重要です。
（「人権教育推進プラン―人権教育指導の手引き・改訂版―」より）

**【県内外国人登録者数の推移】**

　県内の外国人登録者数は、近年において減少傾向が見られますが、２０年前と比較すると、４倍近く増えていることが分かります。その中でも、中国人登録者数の割合が右肩上がりに増えてきています。




　また、県内における学齢期の外国人登録者の状況を見てみると、不就学などの就学状況不明者は５４６人で、外国人登録者全体の２４.７％を占めています。およそ４人に１人の割合で“就学状況不明”となっているのが現状です。（長野県国際課資料 2011 年５月より）

# ほらっ、人権の花が咲いたよ！～ある学校でのエピソード～

## 岩手県山田町を訪ねて

昨年度、職員研修で岩手県山田町の大浦小学校を訪問する機会に恵まれました。山田町は東日本大震災で大きな被害を受け、大浦小学校は避難所となり、子どもたちや住民の方がともに生活を送ってきた学校です。

大浦小の高橋校長から震災の被害や避難所生活の様子をお話いただきました。大浦小の先生方が避難所の皆さんに寄り添い、温かく支援されていたことを知りました。その後学校を案内していただきました。子どもたちの様々な作品が廊下に展示されていましたが、その中である男の子の詩が目にとまりました。

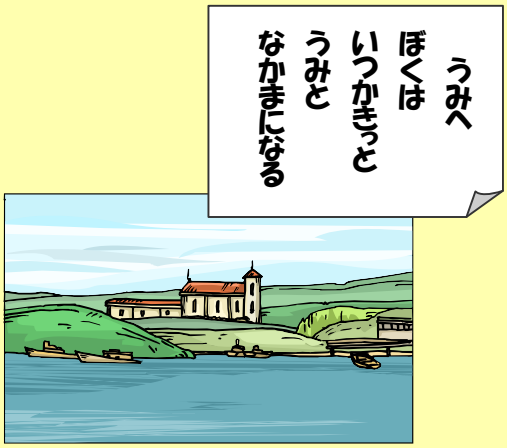
**「ぼくは／いつか／きっと／うみと／なかまになる」**

この男の子は海によって多くのものを失ったと思います。しかし、山田町はこれまで海の恵みを受けて生活をしてきた町。多くのものを奪った許せない存在だけれど、これからも海の恵みを受けながら生きていかなければならないと思います。

どんなに辛くても、怖くても、海のすばらしさをよく知っている。だから、今はまだ、海を受け入れることはできないけれど、「いつか、きっと」海と仲間になって、自分の生活を海とともによりよくしていこうとする気持ちが、この詩に表れていたと思います。この男の子が力強く歩き出そうとする姿とともに、海に寄せる温かな心が感じられました。

子どもたちは避難所生活を通して、人々の温かで強い生き方をしっかりと学んだのだと思います。

温かな心は、人を強く歩ませることができるということを、大浦小学校から教えられました。




## ほめることは・・・

「○○さんは、トイレ掃除の時、水を貯めるタンクの故障に気づいて、先生にすぐ連絡して、使用禁止と書いた紙をドアに張ってくれました。よく気が利くなと思いました。」

これは、あるテレビ番組の中で、クラスの子どもが、○○さんへ向けて伝えていた「ほめ言葉」です。

小学六年生のある学級での取り組みです。

このクラスでは、日替わりで「ほめられ役」の子どもが決まっています。他の子どもたちは、「ほめ役」になります。「ほめ役」は、一日を通して、「ほめられ役」の子どもの様子を見つめたり感じたりする中で、「ほめる内容」を考えます。そして、帰りの会で、「ほめられ役」の子どもに向かって「ほめ言葉」を伝えていきます。

毎年、全国の小・中・高校生を対象に、自己肯定感（自尊感情）に関する意識調査が実施されています。

それによると、子どもたちの自己肯定感は、中学2・3年生で最も低く、学年が進むにつれて、低下する傾向にあります。（義務教育の場合）また、日本の子どもたちは、他の国に比べてみると、「自己肯定感が低い」といった実態も報告されています。

前述した学級の取り組みでは、「ほめ役」の子どもが、「ほめられ役」の友だちのことをじっくりと見つめたり感じたりすることを通して、新たな良さを発見したり共感したりするなど、他者理解を深め合っています。

「ほめられ役」の子どもにとっては、「うれしい」という感情に止まらず、友だちに認めてもらうことで、自分の良さや自分らしさの再発見をし、自己肯定感を育むことができます。

「男女の仲がさらに良くなって、今まで以上に明るいクラスになった」と、担任の先生が感想を語っていました。

「ほめることは、他人も自分も大切にする気持ち（他者理解や自己肯定感）を育てることにつながっていく」そのことを改めて実感しました。

# 人権にかかわる史跡巡り

## おれたちの「学校場」

下の写真は、小諸市加増にある「惟善学校」跡地です。以前は、下の写真のように茅葺きの学校跡が残っていました。しかし、人が住まなくなってからは、屋根が抜けたり、柱が曲がったりするなどして、老朽化が進んでいたため、建物は取り壊されました。

昨年（２０１１年）、その跡地は、「惟善学校跡」と刻まれた石碑などを置き公園になりました。（石碑の後ろに見えるのは、白山神社です。）

公園内の立て札には、「惟善学校」についての説明が記されています。

〈昭和４０年頃の「惟善学校跡」の様子〉
惟善学校跡地公園開園記念パンフレットより

明治13年
惟善学校として設立（開校届け）

明治15年
荒堀学校として改称、認可

明治19年
学区改正となったが、八幡学校に合併できず、八幡学校派出所として存続

明治20年
加増簡易小学校に改正して存続

明治25年
改正小学校令が実施される中、北大井尋常小学校加増分教場として存続

明治 30 年
北大井尋常小学校への統合により廃止

（※原文に一部書き加えをしています）

# 「学校場」とは・・・（公園内にある立て札より）

明治５年（１８７２）明治政府は学制を制定し、全国に小学校を作らせ、６才以上の男女を身分に関係なく就学させようとしました。誰でもいけるはずの学校でしたが、被差別部落の子どもたちは、部落差別により就学を拒否され、あるいは費用や家庭事情等で学校へ行けませんでした。荒堀地区（当時、加増村荒堀組）の人たちは、子どもたちを就学させてくれるように、何度も頼みましたが、受け入れられませんでした。そこで、明治１３年、自分たちで独自に「惟善学校」という名前の学校を設立しました。惟善学校は、部落の頭であった高橋弥右衛門宅の敷地と家が提供され、弥右衛門自身も教員として子どもたちの教育に当たりました。この学校は、地域の人から、「学校場」と呼ばれ親しまれ、就学者は増加していきました。運営は、授業料と地元住民の出資金で行われ、惟善学校は存続しました。長野県唯一、被差別部落の人たちが成立した学校といわれています。
小諸市では、明治時代の厳しい部落差別の中にあっても、教育の重要性を理解し、地域で協力し、惟善学校を設立及び運営したことを後世に伝えるため、平成２２年度（２０１１年）この学校跡地を記念広場として整備しました。

皆さんはこの文を見てどう思われましたか。わたしは、これをはじめて読んだとき、とても驚きました。このようにはっきり由来が書かれた被差別部落にかかわる史跡を、県内では他に知らないからです。

昨今のインターネット、掲示板等を使った差別事象や差別的な書き込みを見ると、不特定多数の方が目にする場所に、このような具体的な記述をすると、差別の意思を持って使われる恐れがあるのでは…と思って心配になります。そう思いながら、この地域の協議会の会長さんにこの公園が作られた経緯をお聞きすると、「あの学校はおれたちの誇りうる歴史だよ。自分たちで学校まで建てたすごい歴史だよ。何も隠すことはない。どんどん知ってもらいたい。」とあっけらからんとした答えが返ってきました。

独自に学校をつくること。それは並大抵なことではありません。他校では授業料がなかったところもあったようですが、惟善学校では授業料を徴収するように経済的な問題もありました。また、高橋弥右衛門さん自らが教員になるなど、専門の教員を得ることができなかったような人事面の問題もありました。それでも、１７年の長きにわたって、この地域の教育の場として存在し続けました。このことからも、この地域の人たちの教育にかける情熱、また「私財をなげうって地域の子どもを育てよう」という高橋弥右衛門さんの偉業。どれをとってもすごい歴史なのです。

以前から、惟善学校を保存して欲しいという地域の声はあったそうです。しかし実際の取り組みはなかなか進まなかったそうです。今回は、地域の総意としてこのような形で、跡地を残し、差別の歴史も含めた惟善学校の由来を紹介することになったそうです。「差別される心配よりも、この地域の素晴らしさを後世に残す必要があるのだ」と皆さんで論議した結果がこの碑になったのです。
惟善学校がそのまま残らなかったのは少し残念ですが、惟善学校を後世に伝える公園ができました。誇りうる歴史遺産がまたここに誕生したように思いました。

# 平成24年度　長野県社会人権教育リーダー研修会を開催します

＝　皆さまのご参加をお待ちしています　＝

## 中南信会場　総合教育センター　８・３１（金）

### 全体講演　10:30-12:20

【講師】伊波（いは）　敏男（としお）さん　〈ハンセン病回復者、作家、長野大学客員教授〉

【演題】「故郷を追われた人たち」―日本のハンセン病問題から何を学ぶか―

【内容】「ハンセン病問題」の過ちの歴史を正しく理解することによって、社会意識の形成過程と克服への挑戦を学びます。ご自身の体験をもとに語っていただきます。

### パネルディスカッション　13:15-15:45

【テーマ】ハンセン病問題について考える

【内　容】当事者、学校関係者、メディア関係者をパネリストとして、「ハンセン病問題の解決に向けての課題と展望」について語り合います。その中で、パネリストと参会者の皆さんとの意見交換（フロアトーク）も行います。

【コーディネーター】　宮下（みやした）　英子（ひでこ）　さん
〈長野人権擁護委員協議会人権擁護委員〉

【パネリスト】
- 伊波（いは）　敏男（としお）　さん
- 畑谷（はたや）　史代（ふみよ）　さん〈信濃毎日新聞社文化部記者〉
- 小林（こばやし）　登志（とし）　さん　〈上田市立丸子北中学校教諭〉
- 小林さんの教え子の皆さん〈ハンセン病を学んだ生徒たち〉

【まとめ】　大池（おおいけ）　昌弘（まさひろ）　さん〈中信教育事務所指導主事〉

## 東北信会場　千曲市更埴文化会館　９・７（金）

### 全体講演　10:30-12:20

【講師】外川（とがわ）　正明（まさあき）　さん
〈鳥取環境大学
人間形成教育センター教授〉

【演題】「同和教育が大切にしてきたこと」　―戦後同和教育の歴史に学ぶ―

【内容】同和教育とは何を目指す教育だったのかあらためて見つめ返すことで、今後の人権教育にどう取り組んでいけばよいのかお話ししていただきます。

### パネルディスカッション　13:15-15:45

【テーマ】同和問題について考える

【内　容】当事者、学校関係者（解放子ども会指導者）、地域リーダーをパネリストとして、「同和問題の解決に向けての課題と展望」について語り合います。その中で、パネリストと参会者の皆さんとの意見交換（フロアトーク）も行います。

【コーディネーター】
宮下（みやした）　英子（ひでこ）　さん
〈長野人権擁護委員協議会人権擁護委員〉

【パネリスト】
- 外川（とがわ）　正明（まさあき）　さん
- 星沢（ほしざわ）　重幸（しげゆき）　さん〈部落解放同盟長野県連合会 前執行副委員長〉
- 島田（しまだ）　一生（いっせい）　さん〈長野市立東部中学校教諭、解放子ども会指導員〉
- 鳴澤（なるさわ）　恵美子（えみこ）　さん〈部落解放同盟東御市協議会書記長〉

【まとめ】　白鳥（しらとり）　貴文（よしふみ）　さん〈東信教育事務所生涯学習課指導主事〉

# 今年度の教育事務所主催の「人権教育研究協議会（研修会）」※詳細は、県のＨＰをご覧下さい。

- **○北信教育事務所**「一人一人が大切にされる心地よい共生社会をめざして学び合いませんか」　期日：７／３（火）　場所：長野合同庁舎
- **○南信教育事務所**「身近なところから考えましょう」　期日：７／５（木）　場所：長野県男女共同参画センター
- **○東信教育事務所**「学校の教師も共同参画！（地域社会と学校がつながり合う研修会）」　期日：７／６（金）　場所：小諸市文化センター
- **○中信教育事務所**「人権でつながる地域づくりをめざしましょう」　期日：７／13（火）　場所：松本合同庁舎
- **○南信教育事務所飯田事務所**「地域社会と学校で共に考えましょう～身近な人権～」　期日：９／24（月）　場所：飯田合同庁舎